
レベル・コントローラー

taka!!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レベル・コントローラー

【Nコード】

N8266Y

【作者名】

taka!!

【あらすじ】

連続殺人事件が起きているさなか謎の女性に

「世界の救世主になって。」

。なぜか安々と引き受けてしまった主人公の佐藤充。そして実は殺人ではなく『修正』だという事実を知らされることとなる。世界の階層を自由に行き来しても記憶を失わない能力を駆使して充はどんどん深い階層に行くこととなるが――――

はたして最下層には何があるのか。

そして世界を救うことはできるのかっ!?

『t a k a! !』が今までの失敗から学んだことをフルに活かした作品です。

『貴公は滅びるとしたら最後にやり残したことは何だ？』

真夜中に、どこからともなくその声は聞こえた。男性とも女性とも似つかないその声。しかし不思議と違和感はない。懐かしい。きっとそれは私たちが遠いどこかで聞いたことがあるからだろう。どこかといっても場所的なことではない。生まれる前にいた場所、または一度死んだ肉体から抜けた魂が還るべきところと言えればいいだろうか。とにかくはつきりとはその声の主が誰なのかはわからない。男は少し迷ってからこう答えた。

「家族と一緒に過ごしたい。」

一瞬、声の主が頷いたように思えた。

直後

世界が

、、、、

——歪んだ——

・・・

「うつ、またか……………」

佐藤 充は目を覚ます。耳鳴りがした。頭がガンガンする。ただの耳鳴りと頭痛だろうか？この頃よくこれで目が覚める。いつも決まって深夜の12時だ。しばらくすると治まってくるのが逆に怖い。幽霊にでも取り付かれているのだろうか？恐怖で寒気までしてきた。しかしそんなことを考えているうちに、また治まった。何だったのだろうか。しかしこんなことをいつまでも考えていても仕方ない。

「寝るか……………」

充は瞼を閉じるのであった。

・
・
・

「ロードが出現しました!!」

「場所はっ!!」

指揮官らしき女性は主を見つけた隊員に反射的に聞く。

「第4地区26号棟辺りです!!」

「反応消失しましたっ!!」

「なんですって!!?!? しっかり探さない!!」

「はっ!!」

しかしいくら捜そうが一度消失したらもう見つからないことくらい充分承知していた。

「また逃げられたわね……。早くイレギュラーを捜さなきゃ……」

指揮官らしき女性は目の前にある巨大な画面を眺めてそう呟いた――

・
・
・

俺、佐藤充は高校2年生だ。友達はまだまあいるほうだろう。しかし登下校はいつも一人だ。友達がいらないからではない。人と一緒に歩くと到着するのが遅くなるからだ。しかしこの日は違った。

「あっ、充君っ。一緒に行こっ?」

「あ……ああ、いいけど……」

「やったっ!今日は運がいいなっ。」

この質問なのか強引な誘いなのかよくわからない言葉をかけてきた

ショートヘアの女の子は幼なじみの松島由香まつしま ゆかである。昔からそういう誘い方をされるが今だに慣れない。

「ねえねえ、顔色悪いけど大丈夫うー?」

「う、うん。大丈夫。」

夜中の耳鳴りや頭痛のことなんかで幼なじみに心配されたくない。

「そおー? 全然大丈夫そおには見えないけど? 何かあったら私に言うんだよー?」

「お前は面倒見のいいお姉ちゃんかつー!!」

「うーん………充君のお姉ちゃんってのもなんかいいなあー………」

ダメだこいつ。早くなんとかしないと………

「とにかく早く学校行くぞ」

「うんっ」

そういう素直なところは嫌いじゃない。

「ってヤベッ!! あと5分で鐘なるしっ!!」

俺達は走るのだった。

・・・

「よお、佐藤。昨日は俺、3回もエクスタシーしたぜっ?」

朝から下ネタを堂々と話すのは悪友の吉田高広^{よしだ たかひろ}だ。

「……………うわ、また変態どもが何か話してるわよ。」

「……………やだやだ、私たちのこと頭の中で犯されてるかもよ?」

「……………えー、もしそうだったら死んだほうがマシだわ」

酷い言われようである……………。そしてなぜか俺も吉田と同類扱いされてる。

「うっせー、黙れっ!!俺の玩具にしてやろうか?」

『ひっ』

女子達は恐怖、と言うかケダモノを見るかのような目で睨んでくる……………。玩具ってまたマイナーなものを選んだな……………

「佐藤っ。お前は俺と昨日ビデオみて8回くらいエクスタシったもんな。」

視線が俺だけ異様に強くなる。俺は慌てて訂正する。

「いやいや、そもそも昨日は一緒に放課後過ごしてないし。ってか

8回とか人を超えてるだろうがっ!!」

「ほう、じゃあ佐藤は人をも超えていると言いたいんだな？」

「そんなこと誰も言ってねーよっ!!」

「俺の耳に狂いはないっ!!」

「耳じゃなくて頭の問題だあー!!!!!!」

「あっ、吉田君っ。おっはー。」

「おっす、おはよー。………ああ、朝から俺は美少女に声をかけてもらって幸せだ。いつそ、このまま死んでもいいや。」

「お願いだからこのまま死んでくれ………」

「しかし、この幸せが明日も味わえるとしたらどうする？」

「なぜに疑問形!？」

「いや、こうしちゃいられない。明日また声をかけてもらった時のパターンを200通り推測しておき返答パターンを350通り考えておいてそれを23時間54分後までに全て暗記しておいて――――」

「70000通りも覚えられる力があるんだったらもつと有効に使えっ!!」

実際こいつは馬鹿ではない。賢くもないけれど………

「つかお前……女の子と話したことn——」

「それ以上言うな……。傷がまた1メートル開く。」

「今『また』って言ったっ!?!?つか1メートルってどっから出てきた!?!?」

「フィーリングさ………」

「なに上手いことまとめようとしてんだよっ!?!?」

「ところでまた事件が起きたって知ってるか?」

話題逸らされたっ!?!?」

「まあニュースで見たけど………」

今一部の地区で連続殺人事件が起きている。犯人はまだ見つからない。だから警察は日中も血眼になって警戒にあたっているところだ。

「それがどうしたんだ?」

「いや、それがさあー………」

吉田は戸惑ってから意を決したように言った。

「……………事件ってこの近くで起きたじゃん?」

「まあ……………。それで注意したほうがいいってか？」

「いや、そうじゃなくて……………」

吉田は声を抑える。

「……………現場見に行かないか？」

・
・
・

一瞬こいつが何を言っているのかわからなかった。現場を見に行かないかだって？

「そんなの無理に決まってるだろ！？」

周りの生徒が一斉にこっちを振り向く。

「……………おい、抑えろって。」

「あ、ああ……………」

声を抑える。

「そりゃ、お前が不可能だと思うのも無理はないが——」

吉田は一息おいてから言った。

「——行けるんだよ。」

「……………どうやって？」

「俺の友達に刑事関係の仕事してる人がいる。そいつに頼むのさ。」

「いくら知り合いだからって——」

「いや、問題ない。見学させざるをえないから。」

「まさか、お前……………。その人の弱みも……………」

こいつは他人の弱みを握って自分の思い通りにさせるのが得意なのである。ついでに弱みの数は約1500個だ。本人から直接聞いた。よくもまあ、そんなに弱みを覚えていられるものだ。そこは純粹に尊敬している。

「でも他の警察はどうやってかい潜るんだ？」

「なに、策ならある。」

「策って？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「その台詞どっかのゲームのコマーシャルで聞いたことあるんだがつ！？そしてそのゲームだとその台詞を吐いて弱い装備のまま戦場に行ったはいいけどやっぱり無理だったからもっと良い装備を――
――」

「ふっ、血迷ったか……。」「

「人の話を最後まで聞けつ！！！」

涙目になる。

「さすがにテクノブレイク8回はきつかったようだな……。」「

「まだ引きずる！？しかも表現が微妙に変わってるし！！！」

なんか……。泣けてきた。とにかく今日の夜11時に校門の前で待ち合わせになった。

・
・
・

夜の11時5分前に校門に到着する。

「こういうことになると率先的になるな……。」「

呆れる。

「まあな、なんかワクワクするだろう？」

「ヒヤヒヤの間違いだろ……………」

吉田は俺よりも前に来ていたのだ。いつもこういうことになる。率先になる。

「ほう……………ワクワクとヒヤヒヤをかけてくるなんてなかなかやるじゃないか。いいねいいねー、惚れちゃうよ」

「何もよくねーよっ！！あと惚れるな！！」

「いいではないか、いいではないか。ちょっとだけだからおじさんに見せてみなさあーい……………グヘッ」

「うわ……………キモ。そんなだからいつまで経っても女の子に気持ち悪がられるんだよ。」

「今、心の傷が3メートル開いた……………」

「なんか数字がリアルっ！！」

「とにかくだっ、あの車に乗りたまえ。」

「お前、いつからそんな偉くなったんだ……………？」

「1分前から。」

「ですよー。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………乗ろうか。」

「そうだな……………」

俺達は案内人の車に乗るのだった。

・
・
・

着いたのは第4地区26号棟の駐車場だった。

「ここか……………」

「みたいだな。俺もテレビでしか見たことないから……………」

形は俺達が住んでいるマンションと同じだが、色と建物の右上に書かれた26という数字だけが違う。と、そこにスーツを着たおじさんが現れた。

「やあ、君達っ。私は吉田君に弱みを持たれて君達を仕方なく見学させなくてはいけなくなった松下誠まつした せいじろう二郎だ。よろしく。」

「いや、そこまで強調しなくていいから……。というか、松下さん絶対率先して見学させに来たよね!？」

「む、何を言うか。私は子供をこんな素晴らしいところに連れて行くなんて断固反対だ。」

「なんかいろいろとだめだ……。俺には対処しきれない……。……。というか次元が違うような気がしてきた……。」。」

「大丈夫だ、松下さんも我々と同じ3次元に生きる人間だ。」

「そういうことじゃねーよ!!！」

「おーい!! 君達っ、そんな大声で喋るんじゃないっ!!！」

『お前が一番声大きいよ!!！』

吉田と良い具合にハーモニー。

「テヘペロ」

「ホントに松下さんに任せて大丈夫か？」

「大丈夫……。……。だ、問題ない。」

「今の間は何っ!？」

そんな喋っていると警戒が厳しいため警察の人とかが来るわけで――

「おいつ、松下っ!! なんか子供の声が聞こえないかー!?!」

偉い人が来たー!!

「……………っ、早く隠れるんだ。」

松下さんは車を指先しながら声を落としてそう言う。幸い暗かったためその人にはまだ見えていないようだ。車の中の秘書っぽい人に誘導してもらって、なんとか後部座席にしゃがんで隠れた。

「松下あー、いないのかー!?!」

近付いてきた。

「あっ、いえ。いますよー!!」

「なんだ、いるなら返事をしろよ。」

「はい、すみません。」

「ところで子供の声がしたんだが聞いてないか?」

「子供の声? こんな11時になんているはずないじゃありませんかー!。」

「ま、まあそうだな。……………。じゃあ、引き続き捜査を続けてくれたまえ。」

「了解です。」

「……………空耳か。」

その人はそれだけ聞くと去っていった。充分離れて見えなくなったのを確認した松下さんは車のドアを軽くノックする。

「死ぬかと思った……………」

「誘っておいてなんだけど実は俺もびくってた。」

「君達っ!! もう心配すること——!! フガッ! フンッ!! ん
——!!」

俺達は必死に松下さんの口を塞ぐ。また見つかったら今度こそ空耳では済まされない。

「フファイフガフギ!! フォーグイガッ!？」

これは俺の推測でしかないが彼はきつと——

【君達!! どうしたっ!？】

と言っていたんだと思う。

「俺って意外と天才かも……………」

新しい自分に気付いたかもしれない。

「何わけわかんないこと言ってんだよっ!!」

「いや、なんでもない……………」

松下さんを抑えるのに約5分。ようやく落ち着いた松下さんは――

「いやー、悪いねー。僕ってすぐ熱くなるところがあるからなあー。悪いのは僕のこの口なんだ。このっこのっ!！」

いきなり自分の口を叩き始めた。

「……………」

「……………」

俺達は呆然とする。なんか……………カオスだった。まるでメリーポッターに出てきたあの二重人格の悪魔みたいなやつだ。

「ふうー。」

松下さんは一通りの自虐行為を終えると気が済んだのか――

「さあ、ついておいで。」

誘導してくれた。そして俺達は建物の中に入っていった。

・
・
・

中の構造も俺達のマンションと同じだったため比較的ついて行きやすかった。そうしてしばらく歩いて行くとある部屋の前に到着していた。

「ここが事件現場だよ。中に入るかい、ってまあ君達はそのために来たのか。じゃあ開けるよ。」

鍵を取り出し鍵穴に差し込む。

『ガチャリ』

「さあ、中に入るといいよ。」

「はい」

俺達3人は中に踏み込む。大きさ的には一人暮らし用の1LDKの部屋だった。家具などはまだそのままだが警察に調べられた跡が残っている。

「これは……………」

中には死体はないとしても血痕の一つすらなかった。

「どこで亡くなっていたんですか？」

「血の跡すらないじゃん？」

吉田は不満らしい。何を期待していたんだろうか。

「そのことなんだが……………」

松下さんは少し言いづらそうに言った。

「被害者が消えたんだ……………」

『えっ……………?』

絶句する。

「でもニュースでは殺人って……………」

「それは嘘とは言えない。被害者が消えたのは犯人が死んだのを隠すためなのかもしれないからな。」

「うっ、そうか……………」

「メディアは正確でない情報でもすぐに流したがるんだよねー。」

松下さんは残念そうな顔をする。

「それで被害者は見つかったんですか？」

「まだだよ。というかもう二度と見つからないような気がする。」

「なんですか？」

「フィーリングさ。」

「今それ流行ってんの!？」

今朝、吉田もそんなこと言ってたし。

「とにかく何も面白みのない事件現場に来たってつまんねーし、帰るか。」

「お前、飽きるの早いなっ!!」

「よしっ、じゃあ松下さん送迎お願いしまーす。」

「任せとけっ!!」

そうして結局、俺達は何も得るものがないまま帰ることにした。

・
・
・

「指令っ、イレギュラーを見つけましたっ!!」

「映像をっ!!」

前方の大画面に映像が映し出される。

「これは……………現場だわ。3人いるけどどれ？」

「一番左の男の子です。」

指令の女性は神妙な顔になる。

「あれがねー……………」

「どうしましたか？」

「いや、イレギュラーって大体女性が多いのは、あなたも知ってるでしょう？なのに今回は男性。イレギュラーの中のイレギュラーね。」

「そうですねー。でも機械はちゃんとイレギュラーに反応してるんですし本当なんじゃないですか？」

「うー…ん……………。尾行をつけて何かあったら報告が来るようにしておきなさい。」

「はっ！！第6班はターゲットの尾行にあたれっ！！」

通信越しにそう命令する。

「これは使えるかもしれないわ……………」

これから何が起こるかは誰も予想できなかった。

この女を除いては————

・
・
・

現場から帰った日の夜はなかなか寝付けなかった。あの事件に何か引っかけを覚えるのだ。

「おかしい……………」

おかしいのだ。まず死体が見つかっていないこと。殺人事件の可能性は低いということ。そして何より警察が今までの事件を全て連続殺人事件として公表していることである。メディアがすぐに発表するのが悪いのではない。それならば今までの事件は、すでに警察が公式に発表しているはずだからだ。なぜ警察は真実を公表したがない？何か公表できない理由でもあるのだろうか。

「まあそんなこと考えても仕方ないか……………。んっ？」

今、窓のそとで何か光ったような……………。

窓を開けて確認する。しかし何も無い。

「気のせいか。」

俺はそのまま寝ることにした。

・
・
・

——翌朝——

「いやー、昨日はなんか期待ハズレだったなー。」

「期待するもんなんて何もなかったけどな……………」

朝の教室で吉田と昨日のことを話していると――――

「ん？ん？充君と吉田君は何話してるのー？」

松島がやって来た。

「Ohhh！！その質問はパターンの中に入ってなかったあー！！！」

「ばたーん？」

「いや、なんでもないから。ホントなんでもない……………。クソッ、こんな返事しかできないなんて……………不覚だ。」

「あははは、吉田君って変なのー。」

松島はただ単に面白がっているだけらしいが――――

「グハッ！！」

『ピ――――』

吉田には効果抜群だったらしい。どこからともなく病院によくある機械の音が……………。

「あれっ、吉田君っ！？どうしたのっ、大丈夫！？」

「――――」

「由香……もういいんだ。そいつは今、新しい領域に達しようとしているんだ。」

「そっかぁー。じゃあ邪魔しちゃだめだねっ。」

どこまでも純情だった。

「ところで実は俺、ストーカーにつかれてるかもしれないんだよ………。」

今朝なんて黒いスーツを着た、がたいの良さそうな数人の男の人につけられていた。

「あははは、ストーカーって充みたいな男の子につくわけないじゃないん？」

「グハッ」

『ピ――――』

また、どこからともなくあの音が……。しかし、これ……結構くるぜ……。？吉田の気持ちが変わったような気がする。しかし早急に回復。

「まぁー、なんだ？あれだ。モテる男は辛いってことだ。」

「えっー、モテてるなんて初耳だよぉー？」

「ハイ、初耳でこれからも永遠に有り得ないことです……………」
撃沈。今度こそは、さすがの俺でも心を支えているものが数本折れたような気がする……………。ついでに修復は不可能。全て折れると魔法使いになれる特典付き。

「俺もいつそのこと魔法使いの仲間入りしようかな……………」
開き直ってブルーになる俺。

「充くーん？」

「いや、なんでもない。うん、将来の自分の姿が見えたような気がしたんだ。」

「そっかぁー。充君って頭いいんだねっ。未来予知までできちゃうなんて由香、尊敬しちゃう。」

「いやいや、予知はできないから……………。想像だけだから。ってか予知できる人なんて尊敬すんなっ！！大体そういうのはハッターだから！！」

「えっ、そーなのー！？」

本気で驚いている。こいつは純粹の域を通り越して無知なだけなのか？

「ついでに俺は予知できるぜっ？」

いつの間にか吉田が復活していた。

「えー、すごい！どうすれば私も予知できるかなー？」

ただのバカだった……………。

・
・
・

「何っ！？なんとかしろっ！！」

「何かあったの？」

「尾行に気付かれた可能性があるそうです。」

「そう……………。」

「よろしいのですか？」

「そのうちすぐに私達のことを知ることになるから問題ないわ。」

「了解っ。尾行を続行せよ。」

・
・
・

『キーンコンカーンコン——』

学校のチャイムが一日の授業の終わりを知らせる。これを聞くと今までの疲れたがどっと出てくる。

「じゃあ今日は部活もないしストーカー退治のために一緒に帰るか。」

「ストーカーの話、信じてくれるのか？」

「いやー？なんか一人で帰るのもあれだし、佐藤と一緒に帰るための理由として……………」

「お前に友達ができない理由が今ならわかる気がするっ！！」

「はあー、何わけのわからないこと言ってるのかね、テクノブレイカー殿。」

「また微妙に進化したっ！？」

そして女子からの視線が痛いよっ！！

「ところでホントにストーカーなのか？」

よくぞ聞いてくれちゃいました。

「ホントだよ。なんか黒いスーッ——」

「それは聞いた。根拠は？」

「それは……………勘だけど。」

確かな理由はなかった。服装、視線、人数、そして俺を追いかけていたというのは気のせいであって確かではない。たまたま俺と同じ道を通る必要があったてたまたまそういう服装だったというだけかもしれない。だが俺の中の何かが確かでないことを確かだと伝えてくるのだ。

「勘ならホントなんだろう。」

「えっ、勘で信じてくれるの？」

「お前の勘はよく当たるからな。この前もテストでお前が教えてくれたところが全部出たし、いつも通り帰ろうとしたら違う道がいいって駄々こねたから仕方なく帰り道を変えたらいつもの道で交通事故が起こったし。」

確かにテストの時はホントに勘だった。しかし交通事故の時は帰ろうとしたら足がすくんで動かなくなってしまったのだ。しかし後ろにはいくらでも歩けたのが不思議だったことを覚えている。

「だから俺はお前を信じる。」

「吉田……………。お前—————」

「だから今度ゲーセンで当たる台を勘で教えてくれよ？」

「お前はやっぱり最低だ。」

そしてなぜかゲーセンで当たる台を教えることで交渉成立となった。

・・・

校門を注意深く通り二人で警戒しながら帰る。

「そんなスーツの男なんておるはず……………ほんまや……………」
「」

「だろ？」

つてかもう下校中の生徒の注目的になっている黒服の男達。

「これだけ下校する人が多ければ—————」

吉田は何かを思いついたらしく俺の手を引いて人込みに紛れ込む。
そして通過したかと思いきや、全速力で走り出した。

「うわっ、いきなり走るな!!」

「これしか手がない。」

「だからって少しペース落とさないとついていけないって!!」

「大丈夫だ、転んだら引きずってやるから。」

「なんかある意味終わりそうだからやめろ。」

「そうか……………、残念だ。」

「……………お前、助ける気ないだろ？」

「楽しいから良いんだ。」

「このドMがつー!!」

いや、考え方によってはドSかも知れない。

「つかそっち俺の家じゃないし!!」

引っ張られるがままについていった。

・
・
・

辿り着いたのは吉田の家だった。

「……………なんでここ？」

「今日こそ一緒にテクノブレイクしようかと……………。」

「……………帰る。」

「まった、俺が悪かった!! だから帰るな。しばらく俺の家にいたほうが得策かと思っただけなんだ。」

「なら最初からそう言えばよかったのに……。まあそれは得策だと俺も思う。」

「だろ、だから俺の家と一緒にDVDでも見ようぜ?」

「何のDVDか想像つくからやめとく……。……。」

「いや、べつに可愛い動物100選とかじゃないから。AVだから。」

「だからそれがダメだって言っただよっ!!」

「くっ……。……、それでは不満だと言うのか。神をも越えるテクノロジーだから……。……。。仕方ない、俺の取っておきのDVD100枚で許してください。」

「ちげーよ!! しかも取っておきで100枚って全部でいくつあるのが気になるわっ!!」

「1000枚くらい?」

「どこに隠す場所あるんだよっ!!!?!」

「オープンさ。」

「親はっ!?!」

「慣れたって。」

「親に捨てられてたー！ー！！」

「とにかく早く家の中に入れ。見つかったら今までの努力が全て水の泡だ。」

「だな。」

家に入る――

「さあ我が家に上がりたまえ。」

「おじゃまします。」

「お母さん、帰ったぞー？」

返事がない。

「あれ、いないのかなー？」

すると奥から金髪ロングの女性が出てきた。

「AH……………いいねえー。」

吉田は無視。

「あなたが佐藤充ね。」

なぜ名前をつ!? というかどうやって侵入した? しかし動揺の色を顔に浮かべると負けそうなため、あくまで冷静を装うべきだろう。

「それがどうした?」

「あなたが必要な。一緒に来てくれるかしら?」

「佐藤っ、行くなっ!! お前だけに良い思いはさせないぞっ!」

約一名、何かを間違えてる。どうしよう。
すると女性は吉田の後に回り込み――――

『ヒュッ』

「グハッ!!」

首にチョップ? を入れた。

「邪魔者は廃除できたわ。自己紹介が遅れたわね。私の名前は安藤あんどう優子ゆうこよ。」

啞然とする。しかし平常心を保つ。

「何が目的だ?」

「それは……………今この場では言えないの。でもちゃんと来てくれたら話すわ。」

「そんな理由で安々とついて行くとでも思っているのか?」

「そうね。でも協力して貰わないと世界が滅びるの。」

『……………は?』

「今はそれ以上言えないわ。」

世界が滅びるだって? そんな根も葉もないようなこと信じられる訳がない。

「信じられないかもしれないけど……………: 真実よ。」

「考えさせてくれないか?」

はっきり言って今すぐにそんな要求呑めるわけではない。

「一刻を争うの。今決めて。」

「どうということだ?」

「もう世界が滅びるまで時間がないっていうことよ。」

「でも家には6時までには帰らないと—————」

「それならなんとかしたわ。」

「?」

どうということだ?

「あなたは今、警察に捕まって留置所にいることになっているから。」

」

なんだって!?

「何の権限があつて————」

「国家特殊計画実施班のリーダー権限よ。」

「……………国家だと?」

国が関わっているとでも言うのか?

「そう、国が動くくらい深刻なレベルなのよ。」

なんでそんな世界が滅びるほど大事なことを公表しないんだ!?

「それも含めて考え欲しいの。私達に協力してくれない?そして世界の救世主になって。」

そんな世界の救世主だなんて……………。

「ねえ、お願い……………?」

くっ、そんな色気で誘おうなんて————

しかし、

俺は――――

俺はっ――――！！

「よし、話だけでも聞きに行こうじゃないか。」

負けた………………。精神的にも肉体的にも限界だった。

「わかったわ。じゃあ早速、外に停めてある車に乗って。」

俺は外に出ると言われた通り黒い車があった。ずっと監視していたのか俺が出て来るとドアが勝手に開いた。

「乗れってことか………………。」

前後が黒い板で分けられているため運転手はわからなかったが俺が乗るであろう後部座席は無人だった。車に乗り込むとドアがまた勝手に閉まり走り出した。

・
・
・

車が走り出して約30分くらい。外の様子は場所を悟られないためか窓が真っ黒だったためどこを走っていたのかわからなかった。ようやく目的地に到着したらしく車が止まる。しばらく待っていると

『ガチャリ』

ドアが今度は手動で開けられた。

「さあ、出てきなさい。」

促されるがままに外に出るとそこは地下駐車場で、またもや黒服の男性がいた。

「ついてきなさい。」

俺は辺りを物色しながら男性について行く。

階段を上がったり下がったりしてようやく着いたのはよくロボット対戦ものに出てくるような、いわゆる本拠地だった。前方には恐らく世界で一番大きいと思われるスクリーンがあり、たくさんの人達が小さなモニターを見ながら何か作業をしている。

「すっげえー……………」

「すごいのは見た目だけじゃないわよ。」

気付くとさっきまで吉田の家にいた安藤さんがいた。

「見た目だけじゃないってどういうことですか？」

思わず敬語になる。

「世界の全ての情報をここが扱ってるの。だから例えば、あなたの個人情報だってここでは丸裸みたいなものよ。」

「んなっ……………!!」

そんなことが許されるのかっ!?

「ところで今日あなたをここに連れてきたのは詳細を話すためだったわね。」

あっ、そうだった。すっかり他の物に目がいってしまっただけで本来の目的を忘れかけていた。

「ここだとなんだから、静かな場所に変えましょう。」

・
・
・

ついたのは椅子と机しかないシンプルな8畳くらいの部屋だった。

「そこに座って。」

俺は安藤さんと対面の席に座る。

「それで世界が滅びるといったけどまだ信じられていないでしょう？」

「はい……………まあ。」

「でしょうね。じゃあ今からいくつか質問するから答えてちょうだい。まず、あなたは夜の12時になると体に異常が起きる。」

っ！！なぜそれを！？

「はい。耳鳴りがしたり頭が痛くなります。でもそれってただ単に病院か何かなんじゃないんですか？」

「いえ、それはイレギュラーの特徴よ。」

「イレギュラー？」

聞き慣れない言葉に戸惑う。

「神に創造した人間の中には神がミスして自分の修正を受け付けない人間がごく稀にいるの。それがイレギュラー。では次の質問。あなたは予想したことがほとんど当たっている。」

「……………はい。」

テストの問題はほとんど予想できる。しかしそれは単に頭がいいからだとばかり考えていた。

「はい、合格。あなたはイレギュラーの一人よ。」

ん？

「イレギュラーの一人ってどういうことですか？」

「他にもこの施設にはイレギュラーが3人いるのよ。」

えー！！聞いてないし！！

「あと説明しておかなくてはいけないこととして、神の修正とイレギュラーの能力について、そして世界が滅びる理由ね。神の修正って言うのはあなたもよく知っていると思うけどニュースで連続殺人事件として取上られている現象のことよ。あれは殺人じゃないの。神がこの世界に相応しくないと考えた人を見ただけ聞いて第2階層まで肉体もろとも落としたことによって被害者がいなくなっただけ。そしてイレギュラーの能力はさっきも言った神の修正を受け付けないこと、そして階層を移動した時の記憶の維持よ。そして今、頻繁に神の修正が起きているの。このまま行くといずれ世界の人口は10分の1にまで減少する。きっと神はこの世界を無くす気なんだから。」

いくつか疑問が浮かぶ。

「階層とか記憶の維持とかってどういうことですか？」

「階層って言うのは今、私達が住んでいるこの世界の下にある世界のことよ。階層は10まであるわ。そして神の修正によって落とされた人は上での記憶を無くすの。しかしあなた達イレギュラーは階層を移動しても上での記憶が残っているの。」

なんとなく話がつかめてきたぞ……………。

「あれ？でも記憶は継続されてもどうやって移動するんですか？」

「それはね—————」

安藤さんは席を立つ。

「ついて来なさい。」

また移動だった。

・
・
・

次に着いた場所は実験施設のような場所だった。いろいろな試作品が展示されてある。奥まで行くと何か手に取って—————

「これで移動するのよ。」

腕時計だった。

「これ……………ですか。」

「見た目は普通の腕時計ね。でもこれは人類の努力の結晶よ。右のボタンで行きたい階層を選び左の上のボタンで決定。どう？簡単でしょ？」

確かにこれなら俺でも使えそうだ。

「じゃあ試しに第2階層にでも行ってきたら？」

「えっ、いいんですかっ!？」

そんな気軽に使える物なんだ……………。

「セットはしたわ。あとは、あなたが決定を押すだけよ。」

ゴクリ……………。本当に大丈夫だろうか？もし帰れなくなったらどうしよう。

「はいっ。」

『ピッ』

押されたあー！！！！！

すると俺が比喻とかではなくホントに—————

、、、

—————
落ちた
—————

（後書き）

紹介文を読んだひとは今までの失敗とは何かが気になったはずです。ズバリ言いましょう。展開が速かったのです。そして誤字脱字が多かった……………。

ではなぜそんな失敗をしてしまったのでしょうか？

理由は簡単、読み返してなかったんです、はい。一番抜かしてはいけないものを抜かしてましたね。

今回の作品はそんな失敗を踏まえて真面目に書きました。そして読んで下さった方はホントにありがとうございます。次回の投稿は少し先になりそうですが、このサイトはブックマークに登録していただくといつでも更新日がわかるシステムになっているのでそれを有効に使っていただければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8266y/>

レベル・コントローラー

2011年11月24日21時52分発行